

◇随筆・近況◇

書齋と研究室の思い出・思い出入れ

浅井辰郎

私が子供ながら独立心を興して書齋を持ったのは小学3年の頃らしい。当時祖母が巢鴨庚申塚に建てた2階屋の北側に一畳の廊下があり、座敷側には障子が、外側には15cm角くらいのガラスの付いた雨戸2枚が嵌っていた。この占領を許してくれた母は、懇ろにも手頃な高さに棚を吊り、座敷から電灯を差し込んで左光線の勉強机にしてくれた。僕は有頂天であった。しかしここは夏や夜はよいが、冬や雨の日曜日は雨戸が開けられず暗くて弱った。当時電灯は夜しか来なかったのだ。あとこの部屋については杉板で小舟を作った記憶が生々しい。そのころ関東大震災、幸い家はどうもなかったが、父は人の勧めでここから今の武蔵小山に移った。しかしここでも書齋は貰えなかった。父の書齋に同居したが間もなく落つかないからと追い出された。そこで母は食堂兼用のベランダの一角を3畳分位白布で囲ってくれ、僕は寝台をでっち上げて昭和6年までずっとここにいた。小学6年～中学5年のことである。ここは工作室もかね、変圧器のコイルを捲いたり、5cm巾レールの半成電車が走ったりもした。その後この家は建てかえることになったので、高校生の生意気で猛烈な要求を出した結果、2階に露台つきの6畳を与えられたが、写真暗室は遂に削減された。快適な部屋ではあったが、京都大学に行ったためその効用と印象は余り多くない。最後は応召中に戦時疎開でこの家もろとも壊されて了った。軍隊―捕虜―復員―戦後の苦境から暫らくは書齋どころではなかった。

しかし復員後すぐに資源科学研究所に入ることが出来、3～4人で1室を使うことになった。夏は天井が焼け、冬は木箱に入れた小さな足温器にふるえ、春は武蔵野の黄塵が容赦なく舞込むという大正10年製の古建築だったが、それでも建国大学、軍隊時代の単なる気候観察から、どうやら気候研究という大学以来の初志に立帰えれた。ただ甚しい費用・器材・文献不足からテーマは応用研究に置かざるを得なかった。灌漑水温上昇施設の研究、日本資源文献目録の編集はその最たるものだが、前者は意外に基礎的な知識を与えてくれたほか、河川水温調査会の設立を見るまでに発展して、私には大変な好運であった。昭和30年位からは総合研究費が貰え、下北半島のヤマセや生

産力、大隅半島の最低気温や生産力の研究がこの古い研究室で遂行され、前者は皆様のおかげで私の学位論文にまで相成った。だから研究室の不足など云々と罰が当たると今も思っている。この頃から法政大学を兼務してそこに2.5×6 m位の研究室をやっと入手したが、2人分の机と本立でもう一杯であり、資源研から私物を移すには余りに狭いので、他の1人に譲り、研究は新大久保の資源研、生活費は飯田橋の大学(学生教育の恩恵は別として)という不便な10余年を過ぎて来た。幸いにして外遊1年、その後3年目には本学に招かれた。

そのときの席は図書室の一隅を本箱と衝立で仕切ただけのもだったが、研究と教育がここに集中して出来るだけでも、文句どころではなかった。その夏、学生控室を半分の間仕切して個人研究室ができ、買い始めた気候学関係図書・器機と共に収まったときの喜びは、上述の道を永く歩いて来た私には特に大きかった。あれから5年、今私は新しい文教育学部本館7階の南西端に45 m²の実験研究室を得た。夢のような気持である。第1に広い。先日までのように体を横にし物を落さぬように心配して歩くことはない。ガス・水道・電話は勿論、電力は3相200Vまで入っている。机・戸棚・実験台・会議机・肘付椅子まで必要数が揃えられた。窓外には東京首部が一望の裡にあり、気候屋には特に好都合。夏季における西壁の焼けに挑もうと志願して入ったこの部屋は、流石に夕刻8時頃には40℃に達して、これまた気候屋の敵愾心を煽る。現に8月の赤外放射温度計による観測でさらけ出されたその結果は、間もなく本学の自然科学報告の活字になろうとしている。

私は順調に行けばもう7年余、この部屋のご厄介になれるはずである。やりたいそしてやるべき実験・研究はこのほか、凍融地形実験、自然物、とくに白い微小水滴の放射率測定……アイスランド全国地誌の完成、生産力的研究の深化……と限りない。今私自身この研究室に対して満腔の感謝を禁じ得ないと共に、それに見合う研究・教育を果さねばと切に思っている。ここで更に、どなたでもこの絶景を見にお立寄り下さったついでに、御鞭撻とアドバイスを戴ければと願っているものである。

松井先生と共に

浅海重夫

昭和28年以来、松井先生と共にお茶大で過ごして20年近くになる。先生は新制大学設立後の飯本主任時代と、そのあとの渡辺主任時代を通じ、また期間は短かったが先生御自身の主任時代